

十年以上前の話だ。

当時、私はある未亡人と SNS で知り合った。最初から少し変わっていた。

ビデオチャットでの顔合わせはなく、私の写真を改めて求められることもないまま、会う約束だけが先に決まった。

初めて会った日の食事中、彼女は自分が関わっている投資や集まりの話を、勧誘でも説明でもなく語った。

私は聞き役に徹した。製品を買うことも、人に勧めることもなかった。

部屋に招かれたとき、棚やテーブルに生活用品が並んでいるのに気づいた。

私は尋ね、彼女は会員であり活動していると答えた。

私に求められる役割は示されなかった。

彼女は、所属グループの内部で人の移動が起きていると言った。

地域や出自で人が動き、人数の偏りが出ている、と。

男性が少ない側は軽く見られる——それだけを付け加えた。

数日後、彼女は「見学でいい」と言って集まりへの同行を提案した。

条件やノルマの話はない。雰囲気を見るだけだと言った。

それが、私が**国際的な集会**に同席することになった理由だ。

私は会員でも勧誘者でもない。外から眺める立場だった。

上海で、アジア各地から人が集められた集会が開かれていた。

前に日本で小さな集まりを見ていたからこそ、規模と熱狂の違いがはっきりした。

最上位層と直系の弟子が登壇し、成功談が連なる。海外本部側の代表が壇上に立ち、簡単な祝辞を述べた。続いて、創業側からのビデオメッセージが流され、会場は一段とざわめいた。

大規模な会場は拍手と歓声で満たされる。私は招待に同行した観測者として、その場にいた。

渡航と滞在は事前に決まっていた。私は客分としての待遇で同行し、別棟の一室を一人で使った。

移動や滞在の手配は整えられていた。役割は与えられなかった。

集会後、未亡人の案内で現地の家々を訪ね、**中枢と顔を合わせた。**

これは、**内規と関係性が力を持つ世界の入口**で、私が見たものの記録だ。